

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	謠曲文學の側面觀[承前]：雜録
Author(s)	高木，敏雄
Citation	龍南會雜誌， 1 0 3： 4 0 - 4 5
Issue date	1903-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5649
Right	

謠曲文學の側面觀

雜

教授 高 木 敏 雄

第三章 國民信仰

謠曲に見ゆる説話の、形式上からの觀察わ、大抵右に述べた位のところ、宜しかろうと信ずる。今度、更に、その成分の上から、觀察して、その中に現われておる、國民信仰とも、云ふ可きものに就て、少しばかり研究して、見たい。之もまた、大に興味のある、事柄であるので。その中にわ、傳説のまゝを、直ちに取つて、講曲の材料にしてあるものもあるが、中には又、國民の信仰、或わ俗間の迷信をば、種として、作者が別に、こしらへた話もある。それを試みに、分類して見たが、極めて不請密であつたが、次の表が出来た。

イ、怪物の存在に關するもの、

甲、妖怪惡鬼などの類、

『鍾馗』、『皇帝』、『紅葉狩』、『安達原』、『羅生門』、『大江山』、『野守鏡』、『山姥』、
乙、動物の怪に關するもの、

『殺生石』、『土蜘蛛』、『三井寺』、『鶴』、『狸々』、『大瓶狸々』、『胡蝶』、『鷺』、

錄

『合浦』、『龍虎』、『大蛇』、『張良』、

丙、草花木石の怪、

『殺生石』、『千引石』、『高砂』、『遊行柳』、『老松』、『東北』、『杜若』、『西行櫻』、

『芭蕉』、『藤』、『六浦』、『花軍』、『雪』、『道明寺』、『女郎花』、『梅』、『半菫』、

『朝顔』、『墨染櫻』、

丁、人間の心靈に關する信仰、

甲、精靈の出現、

乙、憎怨嫉妬の力、

『電雷』、『道成寺』、

丙、女性に關する迷信、

ハ、上界下界龍宮の存在に關して、

甲、天女、

乙、龍神、

丙、海神の珍寶を奪取ると云ふこと、

『海士』、『絃上』、

ニ、劍の超自然力に關する信仰、

『張良』、『大蛇』、『草雉』、『小鍛冶』、『鐘馗』、『皇帝』、『紅葉狩』、『羅生門』、

『土蜘蛛』、

ホ、音樂の不可思議力、

『威陽宮』、『絃上』、『天鼓』、

動物と植物との、怪に關する信仰わ、殆んど世界人類の、共有である。何れの國土を問わす、何れの種族を論ぜず、この信仰を有せぬ者わない。現に有せぬ者わ、あるかも知れぬが、嘗て一度有せし經驗の、無いものわ、斷じてない。この信仰の結果として、生じたものが、即ち動物説話と名つけられ、植物説話と名つけられたものである。此の種の説話わ、説話として、一種特有の形式を具へ、吾々の説話學上、一個の分野を形づくり、興味ある一つの研究問題となつて居る。が、それ等のことは、しばらく他日の問題として、謠曲に見ゆる、動物説話の中で、最も重大なものゝ一つわ、何であるかと、尋ねると、言ふ迄もなく、『殺生石』に見ゆる狐の話で、之に對して、謠曲中の植物説話の大關わ、知らものなき『高砂』の松の話である。はじめのわ、所謂『三國妖婦傳』の白面金毛九尾の狐で、歐羅巴で名高い、ゲーテの詩に歌われて、我國にまでも、既に早き以前から、「狐の裁判」として、知られておる、ライナルトの説話と、比較して見ると、相違の點わ、勿論著しいのであるが、共に動物説話の代表者たる點に於てわ、兎も角も、一致しておる。

此の説話の出處來歴を、精しくしらべたもので、一番精しいのわ、前にも擧げた、曲亭馬琴の『玄同放言』である。即ち所謂八尾の狐なので、その説話わ、俗間の『三國妖婦傳』に於て、その發達の極點に達した。尋ながら、一言するが、自分わ馬琴の『玄同放言』を讀む度ごとに、瀧澤先生の博識

と活躍せぬことわれない。日本文學の祖、徳川時代の二大文獻學者、新井白石と澁澤馬琴とである。自分わ殆んど、口癖の様にかく云ふが、之を決して、自分一個の依怙最負でわ、あるまいと思う。眼ある者わ、宜しく眼を開いて、見るべしだ。そして見ても、矢張そう見ねぬと、云うならば、それわ其人の眼が腐つて居るに、相違ない。視神經がマヒして居るに相違ない。

兎も角も、日本説話文學の上に、現われて居る、狐の話わ、此場合に於て、吾々の研究問題の中で、最も興味多きものゝ、一つである。その他わ、大抵些細な傳説か、又わ一般の迷信によつて、作者が故意に、捻らねたもので、別に取り立てゝ、云ふべき程のことわ無い。

蝦蟇仙術が、謠曲の材料とならなかつたのわ、不思議、大に不思議。

高砂の松の美しい説話、三十三間堂の哀れな柳の話、共に日本植物説話寶庫の珠玉である。この二つの説話の形式わ、姑く別問題として、植物精靈の存在に關する信仰が、その根本の動機であると云う事わ、確かである。『高砂』に見ゆる、松の話わ、至て古い。古い昔から、廣く語り傳へたものであるが、曲中のその他の部分わ、作者が、この説話を基礎として、作つたもので、矢張他の植物説話と同じく、植物の精靈現われ出でゝ、佛法の功德によつて、成佛すると云うことにしてゐる。千篇一律、杓子定規、これが即ち、思想界の進歩の凝滞したる、所謂衰頹時代の、人文的產物の特徴で、止むを得なかつたどわ、云うものゝ、揃いも揃つた二百幾篇、その中で、此こそ天才の製作だと、取り出して、誇るに足る可きものゝ、甚だ多くわ見あたらないうで、エビゴ―ネンのシユビーレイ視すべき、シャブ―チンハフトのものゝみ、多いのわ、吾ながら實に痛惜の次第である。

この植物精靈の信仰わ、廣く世界に通して、存在するのであるが、或學者の如きわ、一步を進めて、如何なる民族を問わず、必ず一度わ、この信仰をもつて居つた者だ、或わ現に、もつて居る時まで、論じたり。尤も日本に於てわ、謠曲文學の發生以前に於て、文學上に、この信仰の現われて居るのわ、極めて稀であり、且つ又極古い所になると、殆んど、この信仰の跡が、見られぬのであれば、民間信仰としての、この信仰の發生、存在の問題わ、しばらく、別問題として、謠曲文學に見ゆる、此種の説話或わ信仰わ、直接或わ間接に、支那の精靈説話から、その系統を引いて居るのわ、あるまいかと、思われる。支那に於てわ、國が古いだけ、この信仰の、文學上に見えたのも、中々古い。くだしく、多くの例證を擧ぐるのわ、此場合でわ、カイテンツエック、唯一つ『元中記』から、擧ぐるところしよう。此書わ、現に存在するのでわない。今でわ、唯その名目と、數條の逸文が、諸書の中に散見するのみであるが、その逸文の中に、次のことが見ゆる。

千載の樹の精わ、青い羊となる。

萬歳の樹の精わ、青い牛となつて、屢々出で、人間界に遊ぶことがある。

漢の桓帝が見た、青い牛わ、萬年の木精であつた。

秦の文公が、終南山の梓樹を伐つた時、中に青い牛があつた。それを、澧水に放つた。

その精靈が、日本説話の中に、見ゆるものゝ様に、優美でないのわ、時代の相違、風土の相違、人種の相違など、その重なる原因である。優美なのわ、謠曲に見ゆる、植物説話の精靈である。

植物―優美、花―女性。

婉麗優美わ、植物説話の特色。

高砂住吉の松の精わ、やさしき老人夫婦、『西行櫻』に見ゆる、櫻の精わ、白髪の老人であるが、その他の曲に見ゆる精靈わ、杜若の精も、芭蕉の精も、藤の精も、六浦の稱名寺の青葉の楓の精も、太郎花の精も、夕顔の精も、朝顔の精も、その姿に於て、凡て美しい女性である。女性と優美なると、その間に、たしかに主觀の心理上、密接なる關係が、存するのである。異朝でわ、娥皇女英、その涙化して、紫の竹を生じ、力山を抜き、氣世を蓋うも、時に利あらざれば、如何ともし難し。一夜美人の魂飛んで、青血化して、原上の草となりて、虞美人草の名高く、我朝では、頼風が妻、放生川に身を沈め、その塚から自づと生ゑ出でた、一本の女郎花。王昭君が胡國に、つかわれされしとき、故郷に柳を植ゑて、我もし胡國に空しくならば、此柳も諸共に枯れと、と云い殘して去つたとも、傳ゑて居る。男を樹にたとゑ、女を花にたとゑるわ、古今東西變らぬ、詩人の筆である。手近き例を舉ぐれば、アーヴィングの『スケッチブック』中の、妻の一篇でもよし、今少し高尚なところからこの、望であれば、テニスン卿の詩集を繙くもよし。此詩人の作わ、最も多く此種の美しい例にゆたかである。